

携帯メールをテーマとした研究と教育 —演習クラスで試みたこと—

東洋大学 文学部 日本文学文化学科 三宅 和子

0. はじめに

大学に奉職する研究者にとって、研究と教育は車の両輪である。よい研究を遂行することで大学、研究界、社会に貢献するとともに、これからを担う自立した社会人（研究者をも含む）を育成することが求められている。しかし、研究と教育の両方を機能させるのはたやすいことではない。

本稿は、この「車の両輪を動かす」という課題に、微力ながら挑戦した演習授業の実践報告である。それはまた同時に、演習の活動を本報告書にまとめるにいたった動機と演習活動の背景説明にもなっている。

筆者は、文学部の日本文学文化学科に所属しているが、1990 年台後半より、現代社会のコミュニケーションにおけるメディアの果たす役割の大きさに注目してきた。ここ 5 年間ほどは、携帯電話をはじめとする電子機器の利用と若者のコミュニケーションとの関連を追及している。携帯電話の研究を続けるにつれて、そのメインユーザーである若者の言語使用のみならず、その人間関係、生活形態、価値観、社会観などに注目するようになってきた（三宅 2000、2001a、2001b、2003a、2003b、2004）。いわば、研究対象としての若者、大学生に興味の目を向けるようになってきた、といえよう。

いっぽう、大学教育で求められるものが変わりつつあることを感じてきた。専門家の育成という役割は、すでに大学院のほうへシフトしている。一部の大学を除けば、大学 4 年間の教育は学生を専門教育の入り口に立たせるところで終わる、と考えたほうが現実的である。だとすれば、現在の大学教育は、狭い専門的教育というより、自立した社会人として充実して生きることのできる幅広い知識と、考える力をもつ人を育てることが期待されているのではないだろうか。近年、大学入学直後の学生に、アカデミックな学習支援が様々な形で行われるようになってきた。このような支援は、初年次に限らず学年が上がっても形を変えながら続行すべきなのではないだろうか。携帯電話をはじめとする言語と社会を結びつけるような研究・教育と、論理的な思考や表現を育成する教育を同時に満たすような活動はできないだろうか。筆者はこのような考え方で、携帯電話をテーマとした演習活動（3～4 年生合同）を始めた。以下その実践を日本語学演習ⅡB、Ⅲの授業にみていく。

1. 専門教育と「日本語」教育

1-1. 日本語学演習ⅡB、Ⅲについて

日本語学演習ⅡB、Ⅲは東洋大学文学部日本文学文化学科の 3～4 年生の学生対象の科目である。日本文学文化学科は大きく 4 分野に分かれ、日本語学、古典文学文化、近現代文学文化、比較文学文化の 4 分野で演習をとったり卒論を書いたりすることができる。3 年生は、これらの分野で提示されている様々な演習の中から、必修科目として 3 科目を選択

して履修しなければならない。いっぽう 4 年生は必修として卒業論文と最も関連がある演習を 1 科目選択することになっている。

本学科は全体的に文学色が強いので、学生は 1～2 年次には日本語学の専門的な研究について、あまり学んでいない。また、文学関連を中心に履修していた学生が、3 年生になって初めて「ことば」を勉強することも少なくない。したがって本演習クラスは、日本語学的な授業が初めての学生もいれば、卒論を書いている学生もいるという、混成クラスである。換言すれば、日本語学への誘いのレベルと、卒論レベルの専門性が同時に期待されているクラスだといえよう。

この科目のもう一つの特徴は、演習（ゼミ）としては履修人数が多いことである。2004 年度の履修生は 3 年生 17 名、4 年生 18 名、これにオブザーバーとして 2 名が参加して、計 37 名である。2003 年度は計 47 名であった。年度によって上下するものの、演習としての活動（学生が自分の調査分析を発表する）や、個別指導をていねいにするという目的を達するには、難しい人数といわざるを得ない。したがって、多人数のクラスの中で、学生が相互に刺激を受け、意欲をもって学ぶような教室運営ができること、これが演習担当者の課題ともいえよう。

1-2. 大学生の「日本語」教育

クラス運営のほかに、もうひとつ課題ととらえていることがある。それは学生が演習や卒論を遂行するに必要な日本語能力の育成である。

近年、大学生の日本語力の低下が声高に叫ばれているが、確かに 10 年前には前提とされていたような事柄に、説明を要すようになってきているのに気づかされることがある。日本全体でみれば、若年層人口の減少により受験生全入状態の大学が増え始め、これまで大学入学までに習得されているとされた知識、学習能力や論理的能力がもはや期待できない事態も起きてきている。そのため、大学の教育も変化を余儀なくされ、大学での勉学の基盤となる日本語・日本語表現の能力、アカデミック・スキルズの導入教育など、広義の「日本語」の教育が、日本中のほとんどの大学で何らかの形で実施されるようになってきている（私学高等教育研究所 2003）。とくに入学後の初年次を中心に、以下のような教育が実践されている。

- ① 転換教育（大学入学前から入学後の勉学・生活への移行をスムーズに行うための教育）
- ② 補習教育（大学での勉学に欠けている学力や知識を補う教育）
- ③ アカデミック・スキルズ教育（大学の勉学に必要な論理的な思考力、表現力、情報収集能力などの基礎能力の育成）
- ④ 導入教育（例、専門の基礎知識を導入しながらアカデミック・スキルズを高める教育）

これまで、高校と大学との溝を埋めるのは、学生個人の努力にまかされていたという感があるが、両者間には想像以上に大きな差がある。その移行がスムーズに行くかどうか、その後の大学や社会での成功を左右することが、次第に認識されるようになってきた。

①の転換教育は、ここに注目し、スムーズな移行を推進する教育を行う。②の補習教育は、例えば医学専攻の学生に基礎的生物学の知識がまったくない例があるように、従来は入学までに習得が前提とされていた科目の知識が現在では保障できていない。このような知識

の欠如を補うために行われている教育である。④の導入教育は、専門教育の導入という位置づけで、学科、学部全体で行う「基礎演習」として扱われることが多い。専門の教師が専門分野の内容を導入しながら、大学での勉強の仕方を指導する。

①、②、④はとくに初年次に集中して教育することで効果が期待できよう。いっぽう、③に関しては、初年次に限る必要はないように思われる。学生が学年ごとに直面するあらゆる到達目標に関して指導していけば、より高い効果が期待されるのではないだろうか。日本語学演習ⅡB、Ⅲでは、③、④を中心に行っていくのが妥当だと考えた。日本語学の世界に初めて足を踏み入れる3年生には、④の導入教育的側面を重視する必要があるだろう。卒論を書く4年生にとっては、③のアカデミック・スキルズの教育が、初年次とは異なる形で役に立つであろう。演習を通じて行うグループワーク、中間発表、レポート作成などの活動にも、アカデミック・スキルズの教育が役に立つ。

以上のような「日本語」教育的な側面に加え、専門の日本語学、ことばと社会を関連づけて分析する社会言語学の考え方、方法論を学ばせるという目標がある。

2. 演習のねらい

1-1で述べたように、この演習には必ずしも専門知識を有しない学生が多数存在する。自分の使っていることばを客観的にみる経験がない学生に、まずは、ことばへの気づきを促したい。それも、言語を現実から切り取って机上でひねり回すのではなく、自分の言語行動の中から、身近かな言語事象に注目し、その分析を通して、ことばと社会、ことばと人間関係の不思議を発見してもらいたい。

このようなねらいに、携帯電話の言語行動の分析は最適である。携帯電話は、現代の若者のコミュニケーションには欠かせない。特にメール機能は、電話機能の利用を大きく上回っていて「話すようにメールを書く」というのが若者間の認識である。しかし、メールが文字言語であること、携帯電話そのものが個人使用であることから、個々のコミュニケーションは私的で閉ざされたものになりがちである。若者の言語使用の流行はあっという間に広がるかに見えるが、かなり狭い人間関係の中での送受信が行われている。ほかの人がどのようなコミュニケーションをしているのか、どのような使い方をしているのか、どのような規範意識や美意識があるのかなど、お互いに興味をもっている。このような興味が、言語事象に対する気づきにつながりやすい。また、自然データといっても電子化された文字書記言語なので、方法を工夫すれば少ない労力でデータを収集する利点もある。

演習の指導で筆者が目指したことを、次に箇条書きにする。

◆ テーマは学生が自分で探すこと

学生にとって興味があることならテーマが見つかりやすい。材料を携帯メールにしているのは、このためでもある。2003年度の報告書を学生に渡し、テーマ設定の参考にさせた。前年度の分析を踏まえたり、その足りないところをさらに追求するといった方法も取れることを示した。

◆ 教室の内外で活発に活動すること

演習は一般に、担当の学生が発表するのを残りの学生が受動的に聞いてしまうという形に陥りがちである。コメント用紙を用意し、発表を批判的に聞き、積極的にコメン

トする、書くという活動を多くした。授業内でできることは限られているので、教室外でもグループで集まってディスカッションや作業分担をするようにした。

◆ **批判的に聴くこと・読むこと**

演習発表にはコメント用紙を用意し、「レジュメについて」、「発表の仕方」、「内容」、「その他」に分けて、自分の意見や感想を書かせた。人の言動を「けなす」のではなく、お互いに真剣に検討し、「相互の向上を目指すための批判」を目指した。また、項目別にコメントを書かせることで、どのような点に注意して発表するべきかを自覚させた。

◆ **考えを文字にして表現すること**

なんとなく思っていること、気づいたことを頭の中にしまいこんでしまわず、それをコメントとして文字にする。発表者はそのコメントを読んで振り返り、文字に表現する。このような活動で、自分の考えを明確に表現することを大切にした。

◆ **人から学ぶこと**

自分が気づかないようなことにほかの人が気づいていることは少なくない。グループ活動、教室内の発表などを通して、人から学ぶことの大切さを実感させた。

◆ **協力して目標に近づくこと**

グループ作業にしたこと、最終的に報告書にまとめるという目標を設定したことで、普段は話を交わさないような人と、協力して作業を進めなければならない状況を作り出した。必ずしも協力的でない人とも折り合いをつけながら作業を進める努力を奨励した。

◆ **相互の接触を大切にすること**

多人数クラスなので、ほおっておけば学生間、学生—教師間の接触密度は高くはならない。はじめにコンタクト先などの情報を提出させ、レジュメの添削や連絡などにはEメールやホームページを頻繁に活用した。また、自主的なゼミアワーをクラス外に用意し、学生の質問や社会言語学の基礎知識などを講義したり話し合ったりする時間を設けた。こうして、多人数でも学生個人が見えると同時に、教員の顔も見えるような演習にした。

3. データの収集

演習活動は、まずは学生たちの携帯電話のメールの送受信記録に残っているメッセージを集めることから始まった。携帯メールのデータを集める場合、いくつか留意しておくべきことがある。

まず、研究の目的によってデータの収集方法を変えたほうがいい。携帯メールで行われている自然な言語使用に興味がある場合は、実際に送受信されたメッセージを集めて分析するのがよい。いっぽう、発話行為の研究を携帯メールのデータで検証してみるようなタイプの研究では、場面の制約や条件を設けた上でアンケート方式でデータ収集するほうが分析が容易になるし、因果関係や関連性がみえやすい。

本演習では自然な言語使用に焦点を当てることを目指しているため、実際に送受信されたデータを使っている。以下にデータの収集の仕方、その際留意した点などを述べる。

① **データの内容**

本年度の調査では、友人間で交わされたデータのみを集め、分析することにした。

2003年度の調査結果から、学生のメール送信相手は友人が圧倒的に多く、その他の属性の相手へのメールを収集しても、比較できるような数や内容に達しないことが明瞭になった。そこで、関係を友人間に限定し、【親しい】【あまり親しくない】の2カテゴリーとした。内容に関しては、これまでの調査の中で頻繁に現れていた【非用件】と【勧誘】のメールに限定して集めた。このような限定をすることで、例えば【勧誘】の場面で【親しい】相手と【あまり親しくない】相手とでは、インタラクションにどのような違いがあるかがみられるのではないかと考えたからである(注)。

2往復以上ある送受信メッセージの中から、【勧誘】のメール、【非用件】(あるいは報告)で始まったメールを選び、親しい友人との送受信、あまり親しくない友人との送受信のものを1件ずつ、計4件のメールを選んだ。多く集められる人は多めに集めた。

② データの収集

選んだメールは、学生が自分の携帯電話から自分のPCに送った。その際、絵文字類など携帯電話の機種に依存するものは加工が必要になった。Docomo、au、vodafoneの絵文字サイトから、絵文字そのもの、それにつけられた名称、番号などがついた絵文字リストをダウンロードし、演習クラスの中で配布した。学生は自分のPCに送った携帯メールの絵文字部分を、このリストを参照して番号に置き換える作業を行った。こうすることにより、データの文字化けを防ぎ、全員がどのPCで見てプリントアウトしても、同様のデータを確認することができる形になった。データとしては、視覚的な絵文字の効果が失われることになるが、最終的なレジュメやレポートに仕上げる時、また絵文字に変換し直せばよい。

③ データの記録

PCに送ったデータには、メッセージのほかに、相手の属性(性別、年齢)、親疎の差、関係、使用携帯電話機種、発話行為の種類(勧誘、非用件)、送信・受信の別、送信・受信の間の時間、メッセージのタイトルを記録した。このデータを演習クラスの補助アルバイト学生のもとに送信した。このようにして、全員のメッセージはエクセルにまとめられ、クラス全体の共有データとなった(巻末データ参照)。

④ データの匿名性

データの匿名性をできるだけ守る努力を払った。メッセージの中に現れる人名は、なるべく原形のニュアンスを残すように変更した。例えば「サッチャン」であれば「ミッチャン」、「さち子が～」であれば「のり子が～」のような変更の仕方を指示した。また、送受信相手には、匿名にした後にデータとして使用することへの了承を得るよう指導した。

4. 演習の流れ

演習活動の簡単な流れを示す。

表1、図1に時間軸に沿った活動の流れを示した。④のレジュメ作成過程から⑧の完成レポートまでを整理してまとめたのが、本報告書の第Ⅱ部の内容である。同様のものを2003年度も作成している(三宅編 2003)。報告書を作成する意義は、学生にとっては、全過程をもう一度振り返り、自分のレポートと他のレポートを、内容と体裁の両面で比較したり振り返ったりすることにより、反省と今後の課題を見つけるという意義がある。教師の立場からは、このような実践を記録として保存すること、次年度の教育に役立てること、

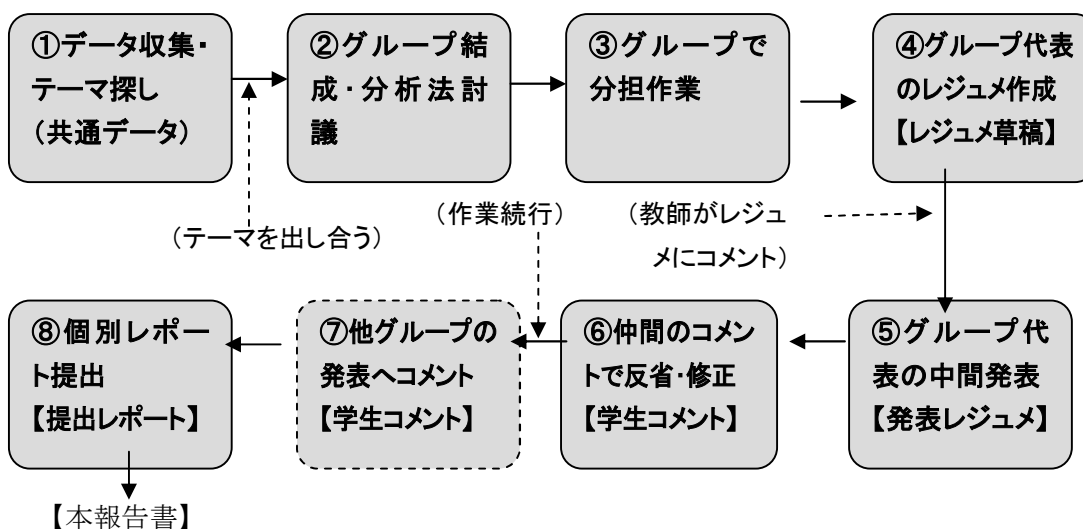
そして、対外的には携帯電話研究の内容と活動を広く知ってもらうことなどの目的がある。学生のわずか数ヶ月間の研究の記録ではあるが、携帯電話の言語行動の研究がまだ緒についたばかりである現在、どのような研究であれ、他大学の学生や研究者の刺激やヒントにつながる可能性があると考えからである。

表1にまず、活動の流れを簡単にまとめ、図1にはその活動過程を分かりやすく整理し直した。なお、【 】内は本報告書に収められた活動記録名である。

表1. 演習活動の流れ

①	集まったデータを見て、調べたいテーマを決める。
②	類似のテーマ別にグループを組み、分析の観点や項目を話し合う。
③	グループ内で分担して分析し、途中経過を発表する。
④	発表前にレジュメを教師に添付メールで送る。【レジュメ草稿】
⑤	教師のコメントを参考に直し、発表レジュメを完成。【発表レジュメ】
⑥	口頭発表後、クラスメイトが書いたコメントを受け取り、分析・発表を振り返る。 【学生コメント】
⑦	作業を続行し、授業での他の学生の発表にはコメントを書いて提出する。【学生コメント】
⑧	最後に、前期の作業をまとめたレポートを各自提出する。【提出レポート】
⑨	作業過程のレジュメ、クラスメイトのコメント、データ、レポートを整理し、演習報告として冊子化する。【本報告書】
⑩	完成した報告書を見て、自分の発表やレポートを他と比較したり振り返ったりして、再度学ぶ。
⑪	報告書は次年度の演習履修者のガイドブックとして機能する。

図1. 演習活動の過程



これを前期日程の上で位置づけると、以下のようになる。

4月14日	イントロダクション（演習の説明、これからの計画）
4月21～5月12日	2003年度演習報告の反省、データ収集
5月19～6月2日	テーマごとにグループを編成、ディスカッション、分析
6月9日～7月7日	グループ発表
7月7日	まとめ
8月2日	レポート提出

5. おわりに

これまでみてきたようなねらいをかかげて行った活動の結果が、本報告書の第Ⅱ部に展開される「携帯メール分析報告」である。学生たちはこの活動を振り返り、演習に関して以下のような感想を述べている。

- ◆自分や友人の身近な言語行動に対する興味が湧いた
- ◆自分たちの生活・人間関係を考えるヒントになった
- ◆データから自分たちのことばの使い方に気づかされた
- ◆卒論のテーマの手がかりができた
- ◆物事を分析的に見ることを学んだ
- ◆ クラスメイトと親しい人間関係が結べた（協力、説得、建設的な批判など）

本稿では、大学における研究と教育の「車の両輪」を動かす試みとして、報告書『日本語学研究報告 2 —携帯メールのコミュニケーション研究：演習クラスの活動と教育—』が作成された経緯、そのねらい、内容、そして演習活動そのものを報告した。

指導を通して、いつもながら学生の発想や行動から学ぶことが多かったと感じた。報告書作りは、わずか数ヶ月の間で学生の活動を指導し、レポート作成を促し、最終報告書にまとめるという、負担が大きいものではある。また、データのとり方、データの使い方など、再考しなければならないこと、工夫しなければならないことも多い。しかし、2003年度の報告書と比較すると、学生の研究も向上し指導の改良もできたと思う。この結果をまた今後の指導につないでいきたい。

【注】

【勧誘】と【非用件】のカテゴリー分けは、成功したとはいえない。作業を始めて、【非用件】と【報告】の違いを選別するのが難しいことが判明。データは結果的にはどちらかを含むものにした。また、自然データでは、話題が変幻自在に変わるので、【非用件】で始まったものが【勧誘】に移行するなど、いくつもの発話行為が一つのメッセージに現れることも少なくない。加えて、学生自身の判断能力が十分ではない、基準が明確でない、などの問題が重なった。結局、このカテゴリー分けは十分に信頼のできるものにならなかったため、使用するにはもう一度分類を再検討する必要がある。

【参考文献】

私学高等教育研究所（2003）私立大学における1年次教育の実際—『学部長調査』（平成

- 13年)の結果から— 私学高等教育研究所調査報告書(「効果的導入カリキュラムの開発」研究グループ 研究代表者 山田礼子)
- 三宅和子(2000)「ケータイの言語行動・非言語行動」『日本語学』Vol.19 No.12 明治書院
- (2001a)「ポケベルからケータイメールへ」『日本語学』Vol.20 No.10 明治書院
- (2001b)「メールのコミュニケーション空間と言葉」『更生保護』4月号 法務省保護局
- (2002)『『日本語表現能力を育てる』とは—日本人大学生の日本語表現能力をめぐる問題と教育の方向性』『文学論藻』第76号(東洋大学文学部紀要第55集 日本文学文化篇) 東洋大学
- (2003a)「対人配慮と言語表現」『文学論藻』第77号(東洋大学文学部紀要第56集 日本文学文化篇) 東洋大学
- 編(2003b)『日本語学研究報告—身近なことばからの発見: 演習クラスの携帯メール分析の活動』東洋大学文学部三宅和子研究室
- (2004)『『規範からの逸脱』志向の系譜』『文学論藻』第78号(東洋大学文学部紀要57集 日本文学文化篇) 東洋大学